

JUESからみた学習経験に関する一考察

三宅 元子・白井 靖敏

Study on Learning Experience from the Results of JUES

Motoko MIYAKE and Yasutoshi SHIRAI

1. 目的

現在、大学では、教育改革の取り組みにより教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画の充実、全学的な教学マネジメントの確立など、改善のための様々な工夫がなされている。その一つは、2017年4月から三つのポリシー(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)の策定と公表が義務化¹⁾され、学生の学修成果の観点から教育活動の改善・進化につながるカリキュラム改革である。なかでも、教育の質的転換に向けた仕組みとして、学生自身による学修の達成状況を点検・改善するツールとしてポートフォリオ、学習評価の可視化としてルーブリック、学生の主体的な学修を促すアクティブラーニングなどが示されている。近年では、多くの大学が取り組んでおり、名古屋女子大学(以下、本学)A学部においても、「学生に自律的、能動的に学修する習慣を身に付けさせる」ことを目標に、2016年度からポートフォリオ、2018年度からルーブリック評価を組織的に導入し、アクティブラーニングも推奨している。

一方、大学生の実態は、2008年、2012年、2016年に合計3回実施された「大学生の学習・生活に関する意識・実態調査」²⁾(ベネッセ教育総合研究所)の結果から、授業時間以外の学習時間はさわめて不足している実態が示されている。また、3回実施した8年間の学生の意識や学びの変化では、アクティブラーニング形式の授業が増え自己主張できる学生が増加していること、「楽単志向」や大学への依存度が高まり大学生生活に満足できない学生が増加していることも指摘している。さらに、ディプロマ・ポリシーを理解している学生ほど大学生生活に満足しているため、ディプロマ・ポリシーを活用し「学びの目標」を明確にすることが提案されている。

そこで、本学においても、平成29年度から公開している三つのポリシーについて、それらの内部質保証として自己点検・評価をする必要がある。現在までは本学独自の調査用紙を用いて学生の実態を調査していたが、教育に関する客観的なデータを収集して大学生の学修成果や大学教育の効果を測定・評価することは重要である。その理由は、大学生の学習経験を調査し学習状況を正確に把握することで主体的な学習を促進あるいは阻害する要因の把握ができる、学習に対する態度・意識(個人的要因)、教育課程の編成や授業のあり方(環境的要因)及びこれらの相互作用を検討できる、学習経験と学修成果(アウトカム)の関連の把握ができるからである。さらに、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの見直し等、教育改善や教育の質保証システムの推進にいかすこともできるからである。

それらのことをふまえ、全国の大学で約5千人の回答数が得られている「日本の大学生の学習経験調査 (Japan University Experience Survey、以下、JUES)」³⁾を実施し、本学学生の学習経験と他大学(全国)との比較を行い、個人的要因と環境的要因から本学の実態を把握し、今後の教育改善に対し考察を加えることを目的とする。

2. 方法

2.1 JUESの実施方法

2.1.1 調査対象者および調査時期

調査対象者は、本学A学部3学科(B・C・D学科)に所属する1年生(以下、1年)全員と「卒業研究」を履修している4年生(以下、4年)である。性別はすべて女性である。人数は、1年が270名、4年が194名であり、学科と学年の内訳を表1に示す。調査時期は2018年1月であり、1年では3学科すべての学生が指定された授業の終了直前に行われた。4年は、B学科とC学科では各自が計画した時間帯で適宜行われ、D学科は指定された日時に行われた。なお、調査は本学の個人情報取得許可の承認を得て実施された。

2.1.2 調査方法

調査方法は、パソコンやタブレット、スマートフォンから回答するWEB調査である。学生は、JUESの実施団体である「河合塾」から発行された各個人のIDを用いて回答する。

2.1.3 調査の内容

調査の内容を表2に示す。調査項目は、(I) 学生情報、(II) 入学者選抜、(III) 学業との関わり、(IV) 学習に対する姿勢、(V) 授業および教育開発、(VI) 学生支援、(VII) 将来の見

表1. 学年・学科別調査対象者数及び回答数

		B学科			C学科			D学科			総計		
		調査対象者数 (n)	回答数 (n)	回答率 (%)	調査対象者数 (n)	回答数 (n)	回答率 (%)	調査対象者数 (n)	回答数 (n)	回答率 (%)	調査対象者数 (n)	回答数 (n)	回答率 (%)
学年	1年生	62	56	90.3%	40	38	95.0%	168	166	98.8%	270	260	96.3%
	4年生	44	23	52.3%	43	28	65.1%	107	98	91.6%	194	149	76.8%
	総計	106	79	74.5%	83	66	79.5%	275	264	96.0%	464	409	88.1%

表2. 調査項目

カテゴリ	設問内容
(I) 学生情報	専攻分野、一週間の時間の使い方(授業への出席時間数、授業の予習・復習および自主的な学習時間数、アルバイトの時間数)、通学時間、居住形態、成績(学生の自己評価)
(II) 入学者選抜	選抜方法、受験科目数、大学の志望順位
(III) 学業との関わり	大学への帰属意識、学業に対するモチベーション、学生自身の学業に対する心構え 授業中のディスカッション、グループワーク、授業外での他の学生との交流等をおこなった頻度 退学を考えたことがあるか、その理由
(IV) 学習に対する姿勢	自分が既に知っていることと結び付けて授業の意味を理解しているか、他のテーマや授業の内容と関連させているか
(V) 授業および教育開発	大学教員について(知的好奇心を刺激した、課題・提出物等へのコメントなど)、学習環境について(教室、施設、設備、教材など) 大学教育を通じて身についた能力・技能(専攻分野の知識、批判的思考力、問題解決力、コミュニケーション能力など)
(VI) 学生支援	就職支援、学習支援は利用しやすかったか、専攻課程のよいところ、改善すべきところ
(VII) 将来の見通し	大学卒業後にやりたいことが決まっているか、大学で学んでいる内容が将来やりたいこととあっているか 卒業後の希望進路(就職、進学、資格取得)

通しに分類され、7つのカテゴリから構成されている。設問形式は、カテゴリごとになっており、例えば一週間の時間の使い方では「学期中に授業の予習・復習および自主的な学習を行う週の平均時間数をお答えください。」に対し、「1. なし、2. 1～4時間、3. 5～9時間、4. 10～14時間、5. 15～19時間、6. 20～24時間、7. 25～29時間、8. 30時間以上」の選択肢を提示するものである。項目数は、1年と4年が共通して回答する設問として80問、さらに1年には大学独自に設定した学修ポートフォリオ及び初年次教育に関する10項目が追加された合計90項目である。

2.1.4 分析対象者と統計処理

分析対象者は、表1に示す回答数であり、1年が260名、4年が149名の合計409名である。回答率は、1年が96.3%、4年が76.8%であり、全体として88.1%となることから本学A学部での学習状況の傾向を分析する上では妥当である。比較する全国の回答数は、男女合わせて1年2438名、4年1532名の合計3970名である。

統計処理は「js-STAR version 9.0.9j」を使用し、学年ごとによる全国との比較は χ^2 検定を用いた。

3. 結果

3.1 調査結果

本稿では、個人的要因と環境的要因から学生の実態を把握することを目的としているため、(I) 学生情報、(III) 学業との関わり、(IV) 学習に対する姿勢、(V) 授業および教育開発の4カテゴリの集計結果から関連の深い設問を抽出して示す。

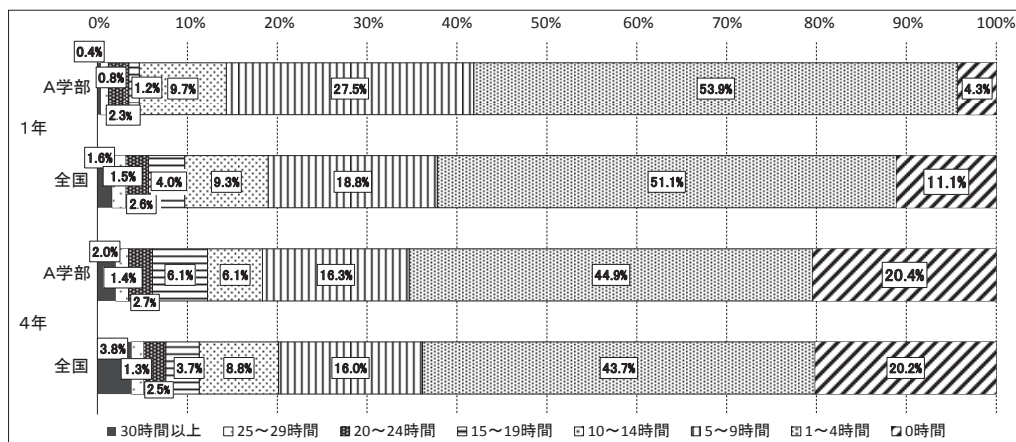


図1. 学期中に授業の予習・復習および自主的な学習を行う週の平均時間数

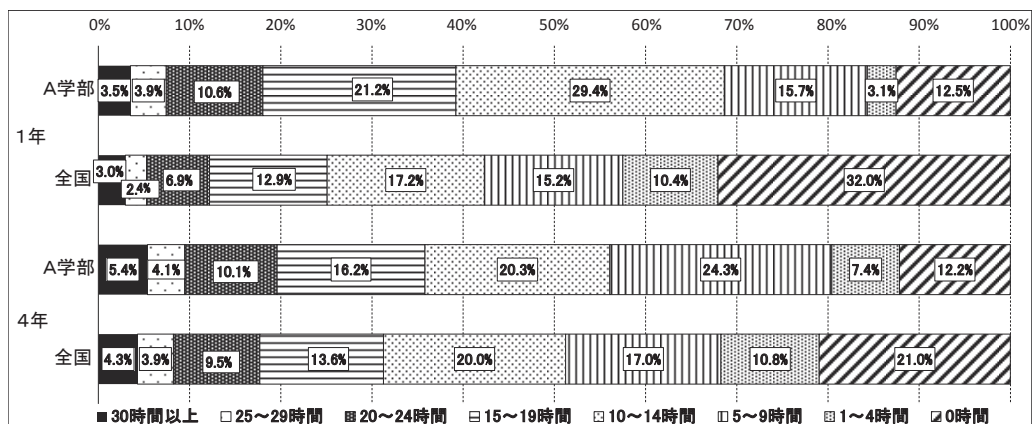


図2. 学期中にアルバイトに従事する週の平均時間数

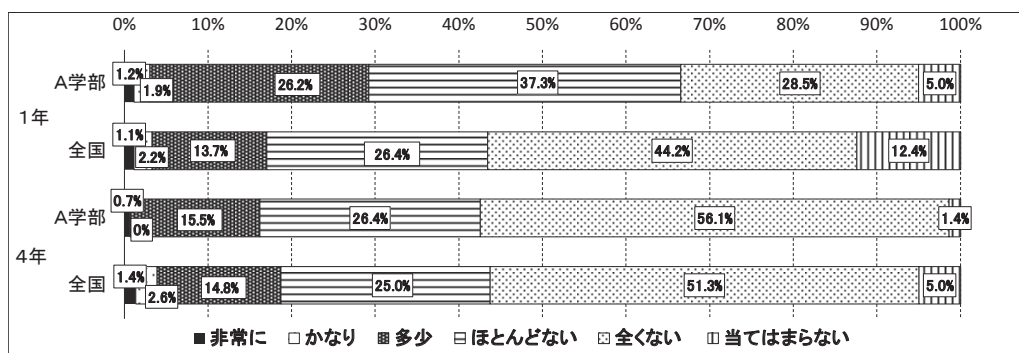


図3. 本年度、アルバイトへの従事が学業に悪影響を及ぼしたか

(I) 学生情報では、学期中に行う授業の予習・復習および自主的な学習を行う週の平均時間数(図1)、学期中にアルバイトに従事する週の平均時間数(図2)及びアルバイトへの従事が学業に悪影響を及ぼしたか(図3)について示す。

まず、予習・復習および自主的な学習を行う週の平均時間数(図1)では、最も多かったのは、1年、4年ともに一週間に「1~4時間」であり、次いで1年は「5~9時間」、4年では「0時間」であった。全国との比較では、1年は全国よりも「0時間」が少なく、「15~19時間」が多く($\chi^2=28.1, p<0.01$)、4年は全国と同じ傾向であった($\chi^2=4.3, n.s.$)。学期中にアルバイトに従事する週の平均時間数(図2)は、1年では「10~14時間」が29.4%、次いで「15~19時間」が21.2%であり、半数以上が1週間に10時間以上アルバイトをしている実状であった。全国との比較では、1年は全国よりも「なし」の人数が少なく、10~24時間までの時間数が多く($\chi^2=78.4, p<0.01$)、4年は全国と同じ傾向であった($\chi^2=11.8, n.s.$)。アルバイトへの従事が学業に悪影響を及ぼしたか(図3)では、1年は「悪影響を及ぼしている」と認識している者が「非常に」「かなり」「多少」を合計すると66.5%であり、半数以上であった。全国との比較では、1年は「まったくない」が全国よりも少なく、「ほとんどない」「多少」が多かった($\chi^2=58.8, p<0.01$)。4年は全国と同じ傾向であった($\chi^2=8.9, n.s.$)。これらのことから、学習時間やアルバイトの時間、アルバイトが悪影響を与えているかという意識では、4年は全

国と同じ傾向であるものの、1年は傾向が全国と異なり、学習時間やアルバイトに従事する時間が長く、アルバイトの時間が長いことが学業に悪影響を及ぼしていると感じつつ働いていることが示された。

(Ⅲ) 学業との関わりでは、学業に対する意欲(表3)は、学業に対する心構えが1年($\chi^2 = 11.4, p < 0.05$)、4年($\chi^2 = 12.7, p < 0.05$)のいずれも「多少できていた」が全国に比べて多かった。モチベーションは1年が「非常にあった」が低く($\chi^2 = 10.7, p < 0.05$)、4年は全国との差がみられなかった($\chi^2 = 0.08, n.s.$)。協調学習への参加(表4)は、1年が「授業中のディスカッションへの参加」において「全くない」が全国より少なかった($\chi^2 = 16.60, p < 0.01$)。一方、4年は全国よりも「頻繁に行っている」が少なかった($\chi^2 = 8.1, p < 0.05$)。この結果から、1年は、授業でアクティブラーニングが取り入れられ、積極的に参加していることが確認された。授業外での学生との交流は、全国と比較しても行っておらず、授業中心の協調学習であることが示された。

(Ⅳ) 学習に対する姿勢では、そう思う、ややそう思う、どちらとも言えない、あまりそう思わない、そう思わないに5点から1点を付与し平均値を求めた(表5)。学習に対する姿勢では、「授業内容の意味を自分で理解しようとする」「自分がすでに知っていることと結びつけて、授業内容の意味を理解しようとする」「できるかぎり他のテーマや授業の内容と関連させようとする」の3項目については、全国と同じ傾向であった。一方、「自分が学習している意

表3. 学業に対する意欲

		A学部				全国			
		1年		4年		1年		4年	
		n	%	n	%	n	%	n	%
本年度、学業に対する心構えができていた	非常に	9	3.5%	5	3.4%	130	5.8%	157	11.0%
	かなり	44	17.1%	30	20.3%	498	22.3%	342	23.9%
	多少	174	67.7%	89	60.1%	1272	56.9%	683	47.7%
	ほとんどない	18	7.0%	13	8.8%	206	9.2%	127	8.9%
	全くない	12	4.7%	11	7.4%	130	5.8%	122	8.5%
本年度、学業に対するモチベーションがあった	非常に	4	1.5%	12	8.1%	118	5.2%	116	8.1%
	かなり	54	20.8%	28	18.9%	458	20.4%	262	18.3%
	多少	159	61.2%	71	48.0%	1253	55.7%	681	47.7%
	ほとんどない	32	12.3%	22	14.9%	260	11.6%	217	15.2%
	全くない	11	4.2%	15	10.1%	159	7.1%	153	10.7%

表4. 協調学習への参加

		A学部				全国			
		1年		4年		1年		4年	
		n	%	n	%	n	%	n	%
授業中のディスカッションへの参加	非常に頻繁	12	4.6%	5	3.4%	155	6.9%	102	7.1%
	頻繁	72	27.7%	17	11.5%	532	23.7%	259	18.1%
	時々	166	63.8%	78	52.7%	1304	58.2%	650	45.4%
	全くない	10	3.8%	48	32.4%	250	11.2%	420	29.4%
学業の一環としての他の学生とのグループワーク	非常に頻繁	15	5.8%	8	5.4%	155	6.9%	103	7.2%
	頻繁	69	26.5%	33	22.3%	596	26.7%	286	20.0%
	時々	132	50.8%	69	46.6%	1157	51.8%	616	43.2%
	全くない	44	16.9%	38	25.7%	326	14.6%	422	29.6%
授業外での学生との交流	非常に頻繁	28	10.8%	12	8.1%	253	11.3%	178	12.5%
	頻繁	56	21.5%	25	16.9%	504	22.6%	283	19.8%
	時々	107	41.2%	60	40.5%	981	43.9%	557	39.0%
	全くない	69	26.5%	51	34.5%	495	22.2%	411	28.8%
自分自身とは文化や考え方が大きく異なる人との交流	非常に頻繁	6	2.3%	1	0.7%	106	4.7%	79	5.5%
	頻繁	24	9.2%	10	6.8%	251	11.2%	180	12.6%
	時々	101	38.8%	48	32.4%	1015	45.4%	527	36.9%
	全くない	129	49.6%	89	60.1%	862	38.6%	643	45.0%

味や内容がわからなくてもただとりあえず学習している」(1年3.39、4年3.18)、「自分でテーマについて考えぬかずに教えられたことをただ受け取る」(1年3.21、4年3.05)、「よりよいやり方を考えずにただ何となく学習してしまうことがよくある」(1年3.23、4年2.98)の3項目は、全国の数値(1年3.14・4年3.10、1年2.99・4年2.89、1年3.23・4年3.03、1年2.98・4年2.95)より、いずれも高い傾向を示した。特に1年には受け身的な授業の受け方が強くあらわれていた。

(V) 授業および教育開発(表6)では、非常に、かなり、多少、ほとんどない、全くない、を5から1点とし、平均値を算出した。4年は6項目のすべてに全国より低い数値であった。1年は、「教員は積極的に学習に取り組むようにしてくれた」が全国より0.16ポイント高かった。一方、「教員は学習したくなるような課題を設定してくれた」では、1年生が全国より0.17ポイント低かった。

4. 考 察

JUESの調査から、本学学生と全国との学習経験の比較を行った。学生の予習・復習の平均時間数は、1、4年のいずれも全国と同じ傾向であり、一週間に1～4時間の学習時間が最も多かった。一日に1時間以下という実状であり、学習時間が確保されているとは言い難い結果であった。

本学が独自に行った調査⁴⁾においても、1日の平均的な予習と復習時間はいずれも60分未満が80%以上であった。また、予習と復習時間は正の強い相関($r=0.846$, $p<0.01$)を示していたことから、予習(あるいは復習)時間が長いものは復習(あるいは予習)時間も長いことが確認されている。このことは、予習と復習をしている学生がいる一方で、予習も復習もしない学生がいることを示している。一方、アルバイトに従事する週の平均時間数は、1年が全国より長く、半数以上が10時間以上であった。そのため、学業に悪影響を及ぼしたと認識している学生が60%以上であり、学業に悪い影響を感じているにもかかわらず、アルバイトに時間を費やしている実状が示された。アルバイトと学業とのバランスについては、大学生活を送る上

表5. 学習に対する姿勢

	1年		4年	
	A学部	全国	A学部	全国
私は、授業内容の意味を自分で理解しようとする	3.74	3.77	3.66	3.79
自分がすでに知っていることと結びつけて、授業内容の意味を理解しようとする	3.74	3.72	3.72	3.79
できるかぎり他のテーマや授業の内容と関連させようとする	3.42	3.44	3.48	3.50
自分が学習している意味や内容がわからなくても、ただとりあえず学習している	3.39	3.14	3.18	3.10
自分でテーマについて考えぬかずに、教えられたことをただ受け取る	3.21	2.99	3.05	2.89
よりよいやり方を考えずに、ただ何となく学習してしまうことがよくある	3.23	3.03	2.98	2.95

表6. 授業および教育開発

	1年		4年	
	A学部	全国	A学部	全国
教員は積極的に学習に取り組むようにしてくれた	3.35	3.19	3.21	3.27
教員は学生の学習について気にかけてくれた・関心を示してくれた	3.08	3.05	3.22	3.30
教員はカリキュラムや評価について明確な説明をしてくれた	3.36	3.29	2.97	3.09
教員は知的好奇心を刺激してくれた	2.98	3.10	2.81	3.14
教員は学習を支援する方向で、課題・提出物についてコメントをしてくれた	2.85	2.95	2.78	3.08
教員は学習したくなるような課題を設定してくれた	2.58	2.75	2.72	2.87

での支援事項として1年次からアドバイスする必要があると考えられる。

次に、学業との関わりでは、学業に対する意欲を表す心構えは1年、4年ともにやや高いが、モチベーションについては1年の「非常に高かった」が低かったことから、平均的なモチベーションは持ち合わせているが高いわけではない。そのため、さらなる向上と定着に向けて、学部・学科独自の「仕掛け」が必要であると考えられる。協調学習への参加は、1年において授業中のディスカッションへの参加が高かった。このことは、授業中にディスカッションの機会が増えたことによるものと考えられ、学科ファカルティディベロップメント（FD）によるアクティブラーニング推進の効果であると推察される。一方、学業の一環としての他の学生とのグループワークは、全国と比較してやや低い。一般的にグループワークは、個人学習よりも思考力、判断力を高めるなどの効果が高いといわれていることから、今後はグループワークを取り入れた効果的なアクティブラーニングの手法を取り入れる必要があると考えられる。

学習に対する姿勢では、「授業内容の意味を自分で理解しようとする」「自分がすでに知っていることと結びつけて、授業内容の意味を理解しようとする」「できるかぎり他のテーマや授業の内容と関連させようとする」については、全国と同じ傾向であった。一方、「自分が学習している意味や内容がわからなくてもただとりあえず学習している」「自分でテーマについて考えぬかずに教えられたことをただ受け取る」「よりよいやり方を考えずにただ何となく学習してしまうことがよくある」の3項目については、全国の数値よりいずれも高い傾向を示した。この傾向は、特に1年に強くあらわれていた。高校までの授業の取り組み方から大学への学びの転換が十分なされていないことが要因と考えられる。そのため、大学で求められる主体的な学習については、「初年次セミナー」等の授業を通じて、授業の受け方やノートテイキングの方法などを具体的に説明していく必要がある。

授業および教育開発では、4年は「教員は積極的に学習に取り組むようにしてくれた」「教員は学生の学習について気にかけてくれた・関心を示してくれた」「教員はカリキュラムや評価について明確な説明をしてくれた」「教員は知的好奇心を刺激してくれた」「教員は学習を支援する方向で、課題・提出物についてコメントをしてくれた」「教員は学習したくなるような課題を設定してくれた」の6項目全てにおいて、全国平均よりも下回った。1年は、授業および教育開発では、「教員は積極的に学習に取り組むようにしてくれた」「教員は学生の学習について気にかけてくれた・関心を示してくれた」の2項目が全国平均より上回り、それら以外は全国平均を下回った。特に、「教員は積極的に学習に取り組むようにしてくれた」が全国より0.16ポイント高く、「教員は学習したくなるような課題を設定してくれた」が0.17ポイント低かった。このことから、学生と教員の関係は良好であることが示されている一方で、学習課題の質には満足していない傾向にあると推察された。

以上のことから、大学教育の内容と学生の実態の「ズレ」を把握できたことは、今後の教育課程の見直しや授業法の検討に役立つと考えられる。いずれにしても、本調査から本学A学部の学習状況の実態について把握ができたことにより、今後の授業等の教育内容について改善の方向性が示唆された。

5. 要 約

本研究では、JUESの調査を用いて、学生の学習状況の実態を全国との比較から検討した。

得られた結果をまとめ、以下に示す。

（１）学生の学習実態では、予習・復習の平均時間数は一日に１時間以下であり、学習時間は確保されている実状ではなかった。１年生は全国よりもやや高い傾向にあるが、アルバイトの影響も考えられ、学習時間の確保のための教育課程や授業法の検討が必要である。

（２）教員は積極的に学習に取り組むようにしてくれた、教員は学生の学習について気にかけてくれた・関心を示してくれた等、学生と教員との関係は良好である。一方、知的好奇心を刺激してくれた、教員は学習したくなるような課題を設定してくれた等、課題の質には満足していないことから、モチベーションを高める課題の設定が必要である。

今後の課題は、本調査結果をさらに詳細に分析し、学生の主体的な学びを促す授業法を検討することである。

付記

本稿は、「平成29年度 名古屋女子大学教育特色化推進経費」を受けて実施された成果の一部である。

参考文献・引用文献

- 1) 大学改革実行プラン（2012）
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/1321798.htm、（閲覧日：2018.8.10）
- 2) ベネッセ教育総合研究所、第3回大学生の学習・生活に関する意識・実態調査、(2016)
<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail.php?id=5259>、（閲覧日：2018.8.10）
- 3) JUES（日本の大学生の学習経験調査）、河合塾
<https://www.kawaijuku.jp/jp/research/jues/>（閲覧日：2018.8.10）
- 4) 三宅元子・白井靖敏、学修ポートフォリオの導入と検証、名古屋女子大学紀要第63号 pp.89-100、(2017)